

1. 目的と概要

アート・環境の島である直島で、参加学生が地元住民の方と協力をしながら、植樹および観光ボランティアガイドをすることによって、直島について理解を深め、地域貢献をすることが今回のプロジェクト事業の目的です。

2. 実施スケジュール

平成 19 年 7 月 1 日～平成 20 年 3 月 21 日

3. 成果の内容及びその分析・評価等

第 1 にフラワープロジェクト、第 2 に観光ボランティアガイドについて述べたいと思います。

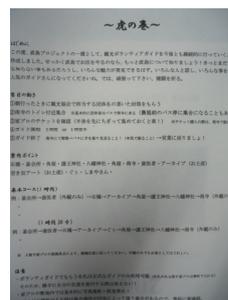
フラワープロジェクトについてですが、私たちは学生ということもあり、土・日・祝日が直島での活動日と制限されています。このために花の水やりはその日に限られてきます。この点を考慮に入れ、植える花の選択として、龍のひげ・菜の花・派牡丹・水栽培の可能なヒヤシンスの 4 種類に決定し、植えました。今年度はフラワープロジェクトの土台づくりの年となり、そのためにまずは私たちの活動拠点



の和 c a f e ぐうからスタートしました。結果として、雑然としていた景観も良くなり、観光に訪れてくれる人々に憩いの場を提供できたと思います。地域活性化の定義はそれに携わる人の数だけありますが、私自身は直島に来てくれる人に笑顔をもたらすことも地域活性化の 1 つだと考えていますので、今回の活動は意義あるものだったと思います。さらに、フラワープロジェクトの一環として、

島民の方々と協力してケナフ植えやケナフ刈りを行うことによって、環境対策を直島で行うと同時に島民の方々との交流も深まったように思えます。

第 2 に、観光ボランティアガイドについてです。この事業は 2 年目になり、今年度の初めには事業を始めるにあたり、観光ボランティアガイドの手引きをつくりました。そして、それを活用しながら約 3 回の研修を終えた後に、正式な観光ボランティアガイドスタッフとして独り立ちし、訪れる観光客に直島の素晴らし



さを伝え、また、私たちも以前に比べ一層直島についての理解を深められたと思います。この観光ボランティアガイドを通して出会った観光客とはその場だけの関係に終わらず、そこから交流が続いているケースもあります。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

現在、直島町ボランティアガイド協会では高齢化が進み、メンバー不足にも悩まされています。そのような状況の中で、私たち香川大学生が共に活動することによって、一緒に活動をする人々の負担の軽減につながり、また、「学生」が主体となり活動を行っているので、高齢化の進む直島に元気を与えられたと思います。さらに、私たち自身が直島で今後活動を行っていくにあたって、島民の方々の良い関係づくりになりました。



香川大学に与えた影響も大きいと思います。私たちは直島で直島スタッフとしてだけでなく、香川大学の生徒としても活動を行っています。そのために、大学と地域社会の関係が希薄化している現在において、大学による地域貢献を学生が介在することによって果たしたことになり、直島の方々には以前よりも香川大学に対して親近感を抱いてもらえたと思います。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

フラワープロジェクトについては、まず、地元の方とのケナフ植樹やケナフ刈り取りをすることによって、普段の学生生活では触れ合えない人たちとの交流を深めることができました。また、ケナフがどのようなものなのかについて学ぶことで、メンバー内の環境に対する知識が育成されました。菜の花・龍のひげ・葉牡丹などの花植えでは、前述したように私たちが直島へ行く機会が土・日・祝日に限られていることもあったために、その花を植えるまでに至った過程にもものすごく時間がかかってしまいました。



しかしながら、「水やりが少なくてもよい花」についてメンバーで考えを持ち寄って話しあうことで、あきらめない心と協調性を育むことができました。以上のような点に僕たちが単に学生として直島で活動するだけではなく、直島スタッフの一員としての自覚も持てたことから、今回のプロジェクト事業は非常に有意義であったと言えます。

次に観光ボランティアガイドについてです。これは単独でガイドをできるようになるまでに、あらかじめ何回か観光ボランティアガイド協会の方々が実際にガイドされている横に付いて、そこから生のガイドのノウハウを教わることになっています。その合間で協会の方とコミュニケーションを取り合いながら協力してガイドを進めていく中で、一般の観光客の方々を相手にガイドをすることの難しさを改めて実感しました。ガイドをするためには案内する観光施設についての説明や案内する順路を知っていればよいというわけではなく、例えば階段がきついから昇



りたくないという場合の対処や、思いもよらない質問への対処もできなければなりません。今回の体験では、そういった現場だからこそ起こりうるさまざまなハプニングに対処していくことによって、メンバーの直島スタッフの自覚が芽生えてきたのではないかと思います。また、そこで得た課題に対処できるように新たに思考錯誤する機会を得られました。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今年度申請させてもらった2つの事業は、開始の年度は違っても共に今年度が、今後引き続き事業行っていくための基盤づくりの年でした。初めにフラワープロジェクトについて、次に観光ボランティアガイドについて反省・感想を述べていきたいと思います。

フラワープロジェクトについては、開始当初からより計画的・具体的な事業展開をしていくべきだったと反省しています。当初は、「地域の人々と協力してやる」と安易な発想から、この事業をしていこうと考えていました。しかしながら、具体的には地域の人々に協力してもらうにも、私たちにそのお返しができるほどの力はありませんでしたし、想像以上に私たちメンバーが地域に溶け込め切れていない部分がありました。今回のこのような反省から、来年度では直ぐに「地域の人々と協力して何かを行っていく」という考えに至る前に、私たちメンバーは「いかに直島に溶け込んでいったらいいだろう」という意識を持っていくことが大事だと痛感させられました。

次に観光ボランティアガイドに関してです。この事業に関しては、今年度、ガイドスタッフの独り立ちが二人に終わってしまいましたが、その他にも研修中のメンバーが多数存在しており、人数不足に悩む直島の団体の手助けもできたことで、これからまだまだ将来性のある事業だと思います。実際にその成果から、高松市内で発行されている情報誌にも取り上げられました。

逆に、1年間を通して来年度に残った課題が2つあります。1つ目は、直島のボランティア協会との間のコミュニケーション不足でした。その結果として、以前教えられていたガイドの予定日に直島に行けば、その予約は既にキャンセルされていたということが何回かありました。この問題は観光シーズンに本格的に突入する前には解決しなければならないことです。もう1つは、現在のシステムでは直島の中でもガイドの地区である本村地区しか理解できない点にあります。現在のシステムでは、和c a f eぐうの営業に支障が出ない範囲内で観光ボランティアガイドをするというものでした。しかしながら、これではガイドをする地区の知識は学ぶことはできますが、その地区以外の直島の観光スポットまでを把握するには不十分でした。そこで、来年度、この事業をするにあたっては、ガイドの地区を理解しながらも同時に、直島全体の理解を深めていく枠組みを確立できたらと思っています。

加えて、観光客の方とのコミュニケーション能力のスキルアップも高めていきたいです。

7. 実施メンバー

代表者	笠井 雅弘	(経済学部3年)		
構成員	小川 有貴	(経済学部4年)	木部 功大	(経済学部4年)
	四宮 ゆかり	(経済学部4年)	立神 安菜	(経済学部4年)
	岡本 匡裕	(経済学部3年)	葛原 由衣子	(教育学部3年)
	島 宜宏	(法学部3年)	唯野 友美	(経済学部3年)
	浅原 裕一郎	(経済学部2年)	稲井 夕夏	(経済学部2年)

楠本 達也	(経済学部 2年)	小林 辰巳	(工学部 2年)
中田 なつみ	(経済学部 2年)	坂口 典子	(経済学部 2年)
下田 達朗	(経済学部 2年)	出井 冴実	(経済学部 1年)
小川 実可子	(農学部 1年)	浪越 裕加	(経済学部 1年)
奥藤 智代	(農学部 1年)	西岡 里浦	(農学部 1年)
北山 淳子	(経済学部 1年)	藤原 浩子	(経済学部 1年)
小西 綾子	(経済学部 1年)	三宅 梨恵	(経済学部 1年)
佐藤 裕衣子	(経済学部 1年)		